

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0005
東京都東大和市高木3-315-1-2-2
http://www.yumuyu.com/
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

東北復興

Rising up , TOHOKU!

2020年(令和2年)1月16日 木曜日

無料

第92号

毎月発行

発行 2020年(令和2年)1月16日 木曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、66歳、経営コンサルタント、趣味は縄文研究、今年1月に『東北先史時代学』を提唱、東北から日本を変えることを標榜。また縄文遺跡保存活動として郷里の涌谷町の『長根貝塚保存活動』開始。映像プロデュース事業にも進出。



どうするこれからの東北復興 大震災発生満9年目の年を迎えて

今年は大震災発生満9年を迎える

今年三月で大震災発生から満9年を迎える新年にあたり、今後の東北復興に関して思うところを記す。

月日の経つのは早い。しかしこの間に東北は何か変わったであろうか。

あの後も、この国では巨大な自然災害がたて続けに発生して、あの震災もそのひとつにすぎないというように感じる。今では大災害といっても東日本大震災を指さず、直近に発生した他の災害の方に心が向く。

直接的な被害者、被災地住人、被災地に強い関係・関心を有する人間以外は、表向きはすっかりあのショックを忘れてきているように見える。

「その後」は当新聞の予想があたってしまった。震災直後から始まったお粗末な復興対策が被災地に

何をもらすのかについて、当新聞も何度も警告してきたつもりだが、案の定、警告していた事態が、この9年間であらわになってきた。ひとつは住民減少である。被災地からどんどん人が流出している。人が減れば、経済もどんどん縮小していく。

そうなれば、働く場所が減るから、ますます人が減っていくという逆スパイラル構造にはまり込んでいく。良い兆しは微塵もない。

また、復興支援も急激に減少した。あれだけ押し寄せてきたボランティアも減り、見る影もない。

その一方で、被災地はボランティアが減っていったと嘆く。いつまでも復興支援をあてにするだけではだめなのにもかかわらず、無償の奉仕を求め続ける。しかし被災者や被災地とずっと同じ思いをいつまでも共有できないのは当然だ。それから、膨大な復興予算を投入して出来上がった復興インフラなるものは、

ゼネコンのための工事であることが明らかとなった。巨大な防潮堤で海が見えなくなり、かえって危ないのではないか。

また建設した防潮堤より高い津波が来ないと誰が断言できるのか。

また、膨大な土盛りをしたが、土が落ち着くまで事故が起きないことを祈るのみである。

ほんとうに必要なところに資金を投入したのだろうか。答えはノーであり、それとも、この9年間で明らかとなったが後の祭りである。

大震災前の衰退し続ける東北はどうなった？

それから、大震災に襲われる以前の、だからだと衰退を続けていた東北はどうなったのか。

漁業の構造も相変わらず高齢化が進み、漁業者は減少し続けている。

また、震災発生前からの大都市圏への人口流出は歯止めがかかるところか、震災後の加速が止まらない。

相も変わらぬ一次産業の利益率の低さも変わらない。この間、だからだとした衰退に切り込んでいくような新たなトレンドが出現したであろうか。

何もしない要素は加わらず、衰退の道をひたすら転がっていくだけに見える。

いまの世代で漁業を終わらせていいの？

漁業の復興に関して、国の支援を求めただけでいいのかと痛切に思うのだ。

あえて厳しいことを言うが、震災直後に、北から支援にきた漁業関係者が、最新の漁業事業に脱皮するサポートを申し出たにもかかわらず被災漁業者たちは拒絶した。

北欧の漁業者は高級取りである。日本の何倍もの給料を得て、しかも尊敬されている。

なのに、その申し出を拒否して、国の支援だけを要求して自助努力を放棄したのだ。その結果はどうなり、今後どうなるのだろうか。

自分たちの分たちの代で漁業を終わらせていいのだろうか。先祖代々継承してきた漁業を、次世代、次々世代に継承していかなくてもいいのかと問いたい。

既得権益にしがみつき、会社資本の参入を鼻から認めないやり方で、現世代が漁業を消滅させる傲慢に気づいているのだろうか。

内陸部はどうか？

沿岸被災地だけがクロージアップされているが、内陸部の衰退もすさまじい。もともと衰退していたところにあの大地震で、農村部の街々はシャッター通りのレベルを越えて、「廃墟通り」や「空き地だらけ通り」が目につく。目抜き通りがそうになっている町もある。

沿岸被災地のように補助金もあまり出ず、出ても極端に少ないので、地震で傷んだ家屋を再建しようという気力も失ったのだろうか。東北のほんの一部の中心都市だけが、復興特需の影響を受けて活況を呈しているが、一步そこを離れると、ゴーストタウン寸前のところまで来てしまっている。

降らたら、どこかの映画撮影隊が撮影を行っていた。外国人の女性監督のようだった。

めずらしいこともあるものだ、そのなかのスタッフの一人に聞いてみた。何の撮影をしているのかと。すると福島第一原発関連の映画を作っているとのことだった。

なぜ福島原発関連映画なのに宮城での撮影なのかと聞いたら、「駅を降りて、まっすぐ伸びるメインストリートに人っ子一人いない町はなかなかない。それで選んだ」と。啞然とした。

その話を町の幹部の方々に話したが、苦笑するばかりだった。

でも、苦笑ではすまない。この町はすでに財政破綻予告をしているのだ。

巨額の復興予算はほぼ使い切った。もう残りはない。ゼネコンや関連企業がみな吸い取っていった。

9年目を迎えるようにする今になって、ようやく本物の課題があらわになったというのに、資金がないのでは打つ手も見当たらない。

このまま東北は衰退を傍観するしかないのだろうか。

何もしないのだ

国に頼らずとも自力で何かやれることはないのだろうか。お金のからない方法は無いのだろうか。

東北への外国人観光客が増えている？

面白いデータを見つけた。観光庁が作成したグラフを見て欲しい。(グラフ参照)

東北六県に来た外国人の延べ宿泊者数が伸びているという。

二〇一八年は二〇一一年に比較すると六倍以上に増えている。震災前の二〇一〇年と比較しても二倍以上となっている。

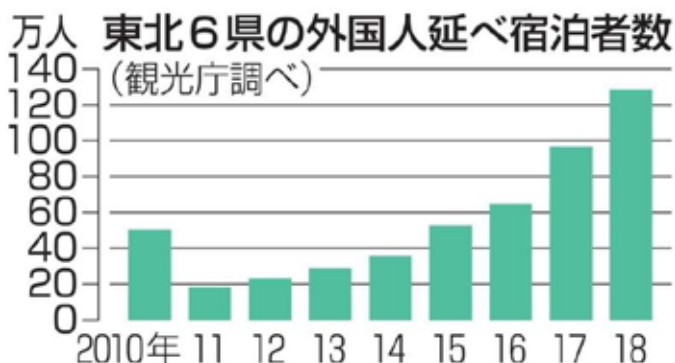
これだけ見れば喜ばしいことだ。

しかし、近年増加を続ける訪日外国人総数と比較すると、増加トレンドは一致するが、絶対数は全然足りない。比較に値しない。

笑えないエピソード

一昨年、この町を訪れたときのエピソードを紹介しておこう。それで臨場感をもって実状を理解してもらえはすだ。

あるとき、この町の駅を



ちなみに、同じく観光庁による二〇一八年の訪日外国人旅行者数は三千百九十九万人であり、前記の外国人の延べ宿泊者数グラフと単純比較はできないが、東北地方全体で百二十万人という数値は比較にならないほど小さい。単純に喜んではいられないし、むしろ全体に占める東北シェアの低さに着目すべきである。

とはいえ、何れも他地方の観光事業の真似をしるというのではない。

東北には東北のやり方があって良い。

しかし、それは、それなりの訪問数があるからのことである。

オンラインピクイヤーで東北が注目を浴びる?

また、このデータに続いて、オンラインピクイヤーでもあり、東北への観光に期待が持てるのと記事もあった。それによると、2020年のお薦め旅行先として、世界的な旅行ガイドブックや有力誌が相次いで東北地方を選んでいるという。(以下は河北新報オンラインニュース2020.1.9記事引用)

東京五輪・パラリンピックで日本に注目が集まる中、自然や伝統文化に加え、東日本大震災からの復興に対する努力も評価し、旅行ガイドブック「ロンリープラネット」が発表した「20年

に訪れるべき世界の10地域」で、東北は3位にランクインしたし、「豊かな自然や祭りなどの文化遺産、食の魅力、おもてなしにあふれているので、冒険好きな人に最適な場所」とある。

さらに、米誌ナショナルジオグラフィックも東北を最高の旅行先25カ所の一つに選んでいるという。

それによると、2020年に訪れるべき旅行先「ベストトリップス」の冒険部門にこのほど、「東北」が選出されたという。

同誌は例年、都市、文化、自然、冒険の4部門で世界各地の計25カ所をピックアップ。東北は今回、日本で唯一選ばれ、旅行雑誌「ナショナルジオグラフィックトラベラー」の最新号で紹介されているとのこと。

東北を「20年東京五輪・パラリンピックが開催される東京から3時間以内」に訪問できる「金メダルにふさわしい最高の未知のトラベルワンダーランド」とし、原生林や峡谷、火口湖、1000年の歴史を持つ神社、由緒ある祭りなどの存在を挙げている。

東日本大震災からの再生のシンボルとして八戸市一相馬市に整備された全長約1000キロの長距離自然歩道「みちのく潮風トレイル」、安比高原(八幡平市)などのスキーリゾート、日本海を望む露天風呂で知られる黄金崎不老ふ死温泉(青森県深浦町)といった

場所を具体的に薦めているようだ。

東北観光推進機構によると、2誌は欧米の旅行者らに影響力があり、選出を海外の旅行博などで紹介すると反応がいいという。機構の担当者は「一連の選出や東京五輪などを契機に、東北ブランドの確立や訪日外国人旅行者(インバウンド)の受け入れ環境整備を進めていく」と話す。

筆者としては「冒険部門」というのがひっかかるが、まあよしとしよう。

人が減り続けている「復興」しても無意味「半移住」のすすめ

そもそも復興させるのは、そこに暮らす人々が暮らしやすいようにするためである。人が減り続けているのであれば、復興の意味がないのである。したがって、復興の第一順位の方策としては、人口増加である。

ひところ、東北被災地への「移住プログラム」が行った。

しかし、いきなりの移住はハードルが高い。

筆者は、いろいろな関係者に「移住」ではなく、「半移住」ではどうかと聞いて回ったことがある。

しかし、国の補助金は「移住」に対してのみ支給されるため、東北の市町村は「移住」だけと呼び掛けている。これに関しては、筆者は

「移住・半移住特区」を、被災地だけでなく、内陸部の衰退する市町村でも導入するよう求めたい。

よく、田舎の人は、地方のために真剣に支援をやるつもりなら「移住して来い」という。

筆者は田舎育ちだが、こうしたことを要求するのは田舎に住む人間の傲慢だと思う。

現在の住環境をすべて捨て、田舎のために全力で貢献しろというのに等しい。

大都市圏でそんなことを他人に求める人はいない。

「移住」でなくとも、「半移住」でも真剣にやれるし、「仮移住」でも、「複数居住」でもないではないか。

料簡の狭い仲間意識、身内意識は捨て去るべきだ。

捨てないでとどんどん人が流出していくのをいやというほど見てきたはずだ。だから、もう止めにすべきだ。

そして「半移住特区」、「よそ者特区」を次から次へと設置することをすすめたい。いまは緊急事態なのだ。

そして田舎町の閉鎖性を打破し、大都市に人が流れて行くのを何より優先して止めるべきだ。

都市部での生きづらさは追い風になるか?

もうひとつ、人の増加という側面から、東北に追い風になりそうなことを真剣に考えなければならぬ。

最近の日本経済の不振から、経済的側面において、大都市圏での生活が厳しさを増し、地方より有利という話はやや幻想と化している。

よく、田舎の人は、地方のために真剣に支援をやるつもりなら「移住して来い」という。

筆者は田舎育ちだが、こうしたことを要求するのは田舎に住む人間の傲慢だと思う。

現在の住環境をすべて捨て、田舎のために全力で貢献しろというのに等しい。

大都市圏でそんなことを他人に求める人はいない。

「移住」でなくとも、「半移住」でも真剣にやれるし、「仮移住」でも、「複数居住」でもないではないか。

料簡の狭い仲間意識、身内意識は捨て去るべきだ。

捨てないでとどんどん人が流出していくのをいやというほど見てきたはずだ。だから、もう止めにすべきだ。

そして「半移住特区」、「よそ者特区」を次から次へと設置することをすすめたい。いまは緊急事態なのだ。

そして田舎町の閉鎖性を打破し、大都市に人が流れて行くのを何より優先して止めるべきだ。

「移住・半移住特区」を、被災地だけでなく、内陸部の衰退する市町村でも導入するよう求めたい。

よく、田舎の人は、地方のために真剣に支援をやるつもりなら「移住して来い」という。

筆者は田舎育ちだが、こうしたことを要求するのは田舎に住む人間の傲慢だと思う。

現在の住環境をすべて捨て、田舎のために全力で貢献しろというのに等しい。

大都市圏でそんなことを他人に求める人はいない。

「移住」でなくとも、「半移住」でも真剣にやれるし、「仮移住」でも、「複数居住」でもないではないか。

料簡の狭い仲間意識、身内意識は捨て去るべきだ。

捨てないでとどんどん人が流出していくのをいやというほど見てきたはずだ。だから、もう止めにすべきだ。

そして「半移住特区」、「よそ者特区」を次から次へと設置することをすすめたい。いまは緊急事態なのだ。

そして田舎町の閉鎖性を打破し、大都市に人が流れて行くのを何より優先して止めるべきだ。

いるだろう、からの「おごつてくれ」である。旧友たちもそこまで本気でないのが分かるので、笑ってやりすごしているが、しかし、東京や大阪などの大都市で働く人たちが、仕事がない、給与が低い田舎で働く人々より裕福かと言われると、首をかしげるしかない。

都内のテレビ局に勤務する坂本直也さん(仮名・30代)は、2019年暮れ、妻と子供二人を連れて、東京駅のホームに立っていた。九州・博多から電車で一時間半はかかる大分の山奥の実家に帰省する為だ。

「博多までは大人一人2万2千円ほど、そこから実家までは4千円くらい。子供は半額ですから、家族分を合わせた往復の移動代だけで15万6千円かかるんです」(坂本さん)

坂本さんは長男であり、また本人が孝行息子な為に、最低でも年に二回は帰省する。すると移動代だけで年30万円を超える計算だ。実家は坂本さん、テレビ局勤務といつても大手キー局の孫会社に所属する情報番組のディレクターで、年収は650万円ほど。自宅は大田区内の中古マンションで月々のローンは11万円(ボーナス払いなし)、自家用車も所有しているから維持費、駐車費用も月に4万円以上かかる。妻はパートに出しており、月に10万円前後の収入がある。

「手取りは妻と合わせて

のかと玉田さんは言うのだ。玉田さんの年収は額面で400万円弱。実家に帰れば「都会のOL」と同級生から羨望の眼差しで見られることもあるというが、住まいは下町の古いワンルームマンションで家賃は5万5千円。独身のため交際費もそれなりにかかるし、仕事用のスーツや上着も必要だ。

「地元の友達は、建設会社の経理として働いていて、家の軽トラックで通勤し、服はジャージだといっていました。結婚もして、旦那の給与は私と同じくらいみたいですが、新築の戸建てを購入しています。子供もいて、のびのびと暮らしている」(玉田さん)

玉田さんは幼少期から都会志向で、高校を卒業すると東京の大学に進学。地元へ帰るつもりなど毛頭なかったというが……。

「昔は『東京は楽しい』といっていて、ちょっと自慢っぽいこともしましたが、今ではそんな見栄もはれなくなりました。旧友と飲むときは、少しだけ多めに払ったりしています。東京に帰ってくると地獄のような節約の日々……。帰省自体がだんだんと苦痛になってきています」(玉田さん)

筆者も全く同様の見解であり、上記二人の気持ちに痛いほどわかる。そういえば、アメリカ・シリコンバレーのIT企業に勤務する筆者の友人の年収が



二千円近いと聞いて、帰国の際にたかつたことがあった。しかし、物価が恐ろしく高騰している同エリア、1LDKの自宅家賃は70万円、ラーメンを食べれば一杯二千円もかかると聞いて驚いたものである。

隣の芝生は青い、とは他人のものは何でもよく見えることを意味し、実際にはそれぞれに事情があるので、やたらにうらやむのは意味が無いことだといふときに使われる言葉だ。正月休みで久しぶりに同級生と会い、色々なことを考えてしまいかもしれない。しかし、年収の多寡や住まいによって感じる他人との格差とは、我々が自己中心的な観点から想像するほどのものではないのかも知れない。

これほど都会暮らしが厳しいものになっているのに、地方への大移動が発生しないことはよくよく考えなければならぬ。

被災地も人口流出に苦しむ。都市圏でも苦しむ人がいる。このねじれ現象を解決するために東北も大胆に変わらなければならない。



第65回

水産業再興のための 料理レシピ紹介

【ババガレイの 煮付け】

ナメタカレイとも言われてる
高級魚です(松本談)



郷土料理愛好家
松本由美子氏

—材料— かれい(ババガレイ)2切れ、生姜1片(薄く3切れ)、水1カップ、お酒大さじ2、砂糖(ザラメ 少々でも)大さじ1、醤油大さじ1/2

—作り方— ①ババガレイの内臓、頭を切り落とします。ババガレイにウロコはありません。ヌメリをよく洗い流します。②鍋に調味料を入れ、煮立たてます。生姜をスライスして入れたら、カレイを投入します。③中火で、よく煮ながら時々、煮汁をカレイに掛け回します。アクを取りながら落とし蓋をして15分ほど煮ます。火を止め味を含ませます。

今は、ババガレイが旬です。この魚は、ウロコがなくツルツルとヌメリがあります。肉質は、甘みがあり柔らかいです。コラーゲンを多く含み、とても旨みがあります。食べてても飽きがきませんね。(松本談)

【カレイ】の種類について

今回の魚は【ババガレイ】。初めて聞く名前のカレイと思いましたが、【ナメタガレイ】ともいうと聞いて納得しました。そんなことで【カレイ】の主な種類についてご紹介します。食用だけでも30種類以上があり、味も千差万別だそうです。また、ヒラメとの違いは、『左ヒラメで右カレイ』と言われるように、ヒラメが左側、カレイが右側に顔が付いています。

『主なカレイの品種』

スーパーでもよく見かけるポピュラーなカレイは3種類です。まずは、【アサバガレイ】は淡白で癖が無く、煮付けや唐揚げ等に適しています。次は【カラスガレイ】。真っ黒な見た目、脂が非常に強く、焼き調理に適しています。最後は【マガレイ】。淡白で癖が無く、毎日でも食べられ、飽きない味。高級カレイ品種としては、まず【ヤナギムシガレイ】高級干しカレイで、通称ヤナギガレイ。雑味のない上品な白身の味わいが特徴。次は【ナメタガレイ(煮魚代表)】。正式名称/ババガレイ。煮魚で旨いカレイ。その他にも【マコガレイ(夏の刺客)】、【マツカワガレイ(刺身代表)】、【ホシガレイ(最強のオールラウンダー)】などがある。変わり種では【オヒョウ】。北海道以北で撮れるでっかいカレイ。大手寿司チェーンでよく使われていたようです。



写真でお伝えする **東北の風景** **岩手の一年を振り返る**

写真撮影 尾崎匠



「地域版SDGs調査 二〇一九」に見る東北の現状

地域ブランドの研究とコンサルティングを行うブランド総合研究所が昨年、「住民目線による悩みや社会の課題、および幸福度や定住意欲度に関する」調査として、初めて「地域版SDGs調査二〇一九」と称する調査を行い、その結果を公表した。

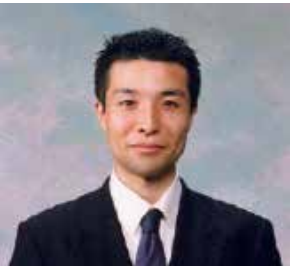
同研究所によるとこの調査、世界中で取り組みが進むSDGsはそもそも地球全体の視点で作られたもので、日本各地での状況を踏まえた「住民の視点」になっ

悩める東北人

自分や家族の問題として抱えている「悩み」があるかを、SDGsのゴールである一六のジャンルの内容を基に、同研究所が独自に設定した四八項目の中から選んでもらったところ、八三・二%の人が一つ以上の悩みを抱えており、回答者一人当たりでは平均三・三六個の悩みを抱えているという結果だった。「不安や悩みはない」と答えた人は一六・八%だった。具体的な悩みはグラフの通りだ

執筆者紹介

大友浩平 (おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagnasi/



Facebook
https://www.facebook.com/kouhei.ohtomo

が、最も多かったのは「低収入・低賃金」で三五・八%、次いで「ストレス」(二八・七%)、「貯蓄・投資」(二八・六%)、「運動不足」(二三・四%)と続いた。

注目すべきは都道府県ごとの差異である。詳細は別表の通りだが、一人当たりの悩みの数では秋田が四・二六で一位、岩手と山形が三・九三で四位、福島が三・八〇で七位、青森が三・七四で九位、宮城が三・五六で一四位と東北六県が軒並み上位にランクインしていた。結果からは「悩める東北人」とでも言うべき状況が見える。全都道府県で唯一悩みの数が四を超えている秋田を見ると、「低収入・低賃金」が四六・〇%と半数に迫っている他、「貯蓄・投資」(三四・〇%)、「ストレス」(三一・一%)

「少子化」こそ取り組むべき課題

「社会として取り組むべき課題だと思ふもの」を聞いた設問では、八五・八%の人が社会が取り組むべき課題があると答えていた。その具体的な課題として、やはりSDGsのゴールの16のジャンルを基に同研究所が独自に設定した48項目の中から選んでもらった

「満足度」でも下位に沈む東北六県

「満足度」が六・二%、「あまり満足していない」が二八・九%で二割強が「満足していない」と答えている。これをまた都道府県別で見ると、東北六県の満足度の低さが浮き彫りになっている。一位は千葉県(六六・四)だが、これに対して宮城が三四位(六〇・二)、山形が三九位(五八・八)、福島が四一位(五八・三)、岩手が四四位(五六・九)、青森が四六位(五四・二)、秋田が四七位(五一・四)だった。

満足度に大きな影響を与えている「悩み」と「課題」を見てみると、「悩み」では「電車やバスの路線廃止・減便」(相関係数マイナス〇・七二)、「病院・医療施設の不足」(マイナス〇・七〇)、「低収入・低賃金」(マイナス〇・六七)、「人材不足・後継者不足」(マイナス〇・六三)、「就職難」(マイナス〇・六三)、「課題」では「人口減少・過疎化」(マイナス〇・七五)、「商店街の疲弊・店舗の減少」(マイナス〇・七五)、「農林水産業の衰退」(マイナス〇・六三)、「空き家の増加・ゴーストタウン化」(マイナス〇・六一)が挙げられていた。

「西高東低」の「幸福度」

同研究所のニュースリリースでは触れられていないが、今回の調査では幸福度についても聞いている。「あなたは幸せですか」という問いに対して、「とても幸せ」「少し幸せ」「どちらでもない」「あまり幸せではない」「全く幸せではない」の五段階から一つを選んでもらい、それぞれの回答は一〇〇点、七五点、五〇点、二五点、〇点として数値化し、全回答の平均を「幸福度」としている。一位は宮崎で七二・四だが、山形が三五位(六五・七)、宮城が四〇位(六四・一)、青森と福島が四三位(六三・八)、岩手四六位(六三・三)、秋田四七位(六〇・五)と東北六県が軒並み低い。ちなみに、これら東北に交じっ

「カギはやはり「少子化」対策か

これまで見てきた東北の低い「満足度」「定住意欲度」「幸福度」に、「満足度」との相関で見た「悩み」や「課題」が大きく関係していることは容易に想像がつく。しかし、恐らくは東北と同様の「悩み」や「課題」を抱えていると考えられる他の地域、特に九州を始めとする西日本が東北ほど「満足度」や「定住意欲度」「幸福度」が低くない結果を見ると、「悩み」や「課題」だけがこれらの結果に影響を与えているわけではない様子も見えてくる。

それが何なのか、明確に特定できていないわけではなく、漠然と「出生率」は一つのカギになっている気がする。第八六号で紹介した通り、東北は出生率が、宮城の一・三〇を筆頭に、秋田一・三三、岩手一・四一、青森一・四三、山形一・四八、福島一・五三と低い一方、九州は沖縄一・八九、宮崎一・七二、鹿児島一・七〇、熊本一・六九、長崎一・六八など、軒並み

結論としては、結局第八六号と同じようなものになるのだが、子どもを産めない、子どもが生まれない大きな理由として、今回の調査にあった「低収入・低賃金」や「貯蓄・投資」についての「悩み」があることとは疑い得ないところであるので、子どもを産み育てることへの経済面での手厚い支援がない限り、今の状況は一向に改善されないと考えられるのである。

て東京が四五位(六三・五)なのも目を引く。また、エリア別に幸福度を見ていくと、北海道・東北は平均六四・〇、関東は六五・三、中部六七・九、近畿六七・七、中国・四国六七・〇、九州六八・九となっており、全体的に「西高東低」であることが窺える。

この「子どもが生まれる地域」であることが、地域の「満足度」「定住意欲度」「幸福度」と密接に関係しているように思えるのである。してみると、今回の調査で「社会として取り組むべき課題」として真っ先に「少子化」が挙げられていたのは誠に当を得たものであり、かつ東北六県こそが共通して真っ先に取り組まなければならない課題であると考えるのである。

この「子どもが生まれる地域」であることが、地域の「満足度」「定住意欲度」「幸福度」と密接に関係しているように思えるのである。してみると、今回の調査で「社会として取り組むべき課題」として真っ先に「少子化」が挙げられていたのは誠に当を得たものであり、かつ東北六県こそが共通して真っ先に取り組まなければならない課題であると考えるのである。

順位	都道府県	点
1	北海道	84.2
2	埼玉県	80.6
3	大阪府	78.3
4	神奈川県	78.0
5	東京都	77.8
6	東京都	77.5
7	東京都	77.4
8	東京都	77.3
9	東京都	76.9
10	東京都	76.8
11	東京都	76.2
12	東京都	76.2
13	東京都	76.2
14	東京都	75.6
15	東京都	75.3
16	東京都	74.9
17	東京都	74.5
18	東京都	74.4
19	東京都	74.1
20	東京都	73.8
21	東京都	73.6
22	東京都	73.5
23	東京都	73.3
24	東京都	72.7
25	東京都	72.4

順位	都道府県	点
1	千葉県	66.4
2	東京都	65.9
3	東京都	65.5
3	東京都	65.5
5	東京都	65.0
6	東京都	65.0
7	東京都	64.8
8	東京都	64.4
9	東京都	64.3
10	東京都	64.2
11	東京都	64.1
12	東京都	63.7
13	東京都	63.8
13	東京都	63.8
15	東京都	63.6
16	東京都	63.1
17	東京都	63.0
18	東京都	62.6
19	東京都	62.5
20	東京都	62.2
21	東京都	62.0
22	東京都	61.7
22	東京都	61.7
24	東京都	61.5
24	東京都	61.5

順位	都道府県	悩み数
1	秋田県	4.26
2	秋田県	3.96
3	秋田県	3.95
4	秋田県	3.93
4	秋田県	3.93
6	秋田県	3.90
7	秋田県	3.80
8	秋田県	3.75
9	秋田県	3.74
9	秋田県	3.74
11	秋田県	3.63
12	秋田県	3.60
13	秋田県	3.58
14	秋田県	3.56
15	秋田県	3.54
16	秋田県	3.50
17	秋田県	3.48
18	秋田県	3.47
19	秋田県	3.46
20	秋田県	3.44
21	秋田県	3.43
22	秋田県	3.39
23	秋田県	3.36
24	秋田県	3.35
25	秋田県	3.29

順位	都道府県	点
1	北海道	84.2
2	埼玉県	80.6
3	大阪府	78.3
4	神奈川県	78.0
5	東京都	77.8
6	東京都	77.5
7	東京都	77.4
8	東京都	77.3
9	東京都	76.9
10	東京都	76.8
11	東京都	76.2
12	東京都	76.2
13	東京都	76.2
14	東京都	75.6
15	東京都	75.3
16	東京都	74.9
17	東京都	74.5
18	東京都	74.4
19	東京都	74.1
20	東京都	73.8
21	東京都	73.6
22	東京都	73.5
23	東京都	73.3
24	東京都	72.7
25	東京都	72.4

この「子どもが生まれる地域」であることが、地域の「満足度」「定住意欲度」「幸福度」と密接に関係しているように思えるのである。してみると、今回の調査で「社会として取り組むべき課題」として真っ先に「少子化」が挙げられていたのは誠に当を得たものであり、かつ東北六県こそが共通して真っ先に取り組まなければならない課題であると考えるのである。



冬晴れの荒神神社



社務猫の顔出しパネル



あなたは だあれ



みくじ



つらら

シリーズ 遠野の自然

「遠野の小寒」

遠野 1000 景より

年明け早々、中東で大きな戦争が始まるのかとひやひやした。幸いにも当事国双方が冷静を保ち、何とか表向きの平和を取り戻したように見える。

年末には、犯罪容疑者となった国内自動車メーカーの元外国人経営者の海外逃亡事件があり、余波は年を越した。

この二つで、ゆっくりと正月気分を味わうどころではなかったし、非常に落ち着かない一年のスタートとなってしまった。このままあわただしい一年になるのだろうか。そうなっては欲しくない。

気分を切り替え、ゆったりとした風景を眺めて、落ち着きを取り戻そうと思う。



竹に雪



段々水路



野生動物の痕跡

東北の祭りシリーズ ①

北上・みちのく芸能まつり（岩手）



鹿踊（太鼓踊系）

新年号の今回号から東北の祭りをシリーズで取り上げてまいります。
かといって、数百万人もの観光客を呼ぶ超メジャーな東北の祭りを取り上げるのではなく、地元に着して、地元の住民が運営して楽しんでいるような準メジャーな祭りを取り上げてまいります。
第一回は『北上みちのく芸能まつり』です。
この祭りは岩手県北上市で八月初めの三日間に亘って開催される祭りで、この地方の民俗芸能が数多く披露され、最終日には花火大会もあります。毎年20万人を越える人出で混雑するようですが、中でも花火大会は最も混雑するようです。



鹿踊（幕踊系）



鬼剣舞



中野七頭舞



虎舞



中野七頭舞



権現舞



神楽



田植踊り



田植踊り



祭りの開始

東北の埋もれた歴史掘り起こし 地道なフィールドワークで弥生 稲作文化を主張して早世した在 野の考古学者・森本六爾に続け

在野の考古学者 森本六爾の業績

新たな発見はいつもアカデミズムと言われる大学や研究機関から誕生するとは限らない。

むしろ革新的な発見や理論を産み出すのは在野の研究者が多いといっても過言ではないようだ。

明治三十六年に生まれ、昭和の時代まで、わずか三十二年間という短い時間を生きた在野の考古学者の森本六爾という人はまさに後者の典型である。

下記の略歴にあるように、「古事記」や「日本書紀」の『神話』を基に日本の国の成立を教えていたアカデミズムの権化の、東京帝大を中心とした日本考古学会が思いもつかないような革新的な「弥生時代」を突如として提示した。



森本六爾氏

しかも、地道な弥生時代の土器分析というフィールドワークと、同じく在野の考古学者のネットワークにより、単なる空論ではなく、「物証」を基にした推論により打ち立てたのである。

そうした業績を三冊の番組が最近取り上げた。筆者はそれを、ビデオではなく二度も見て、しっかりと記憶に刻みつけた。

夫唱婦随の研究

この研究には、実はもう一つの側面がある。それは、教師を続けながら夫の研究生活を経済的に支え、かつ叱咤激励し、共に闘い、夫を支えた妻・ミツギの存在である。

そのサポートにより夫は教師を辞め、考古学研究に没頭できたのだ。

しかし無理がたたって、妻は三十一歳で病死し、夫もすぐ後を追った。まことに短い生涯であった。

名もない在野の考古学者が、大して売れもしない研究機関誌を発行しても生活はままならない。それを全面的に支える妻

の生き方というのは壮絶であらう。

その夫唱婦随の研究が「新しい弥生時代」を切り拓いたのである。

弥生の水田稲作農耕

森本の理論とは、弥生時代の水田稲作農耕の存在を発見したモミガラ痕のある土器が発端となり、その後、そうしたモミガラ痕のある弥生土器が全国で発掘されたことから、弥生時代の水田稲作農耕の存在を導き出したのだ。

しかし、今では当然のように思われているその理論を、当時のアカデミズムは無視し続けた。

「水田跡が発見されていないから空理空論だ」というのである。

これは難癖としか言いようのない評価であり、もともと真正面から取り上げるつもりなどなかったのだ。しっかりとしたモミガラ痕のある土器分析から導き出した結論であり、無視する方がおかしいのである。

アカデミズムとは何か

筆者は常々思うのだが、大学や公的研究機関が必ずしも真理探究のためだけに研究しているとは言えないのではない。

番組でも某学者が言っていたように、学会は自分の地位を守るための競争の場であり、場合によっては競争相手を、真実かどうかにかかわらず蹴落したりする場のようである。

筆者のつたない経験から、学者間のそうした争いも、単なる想像ではない。

そうして、真実とはいえないが、多数派を占める派閥が学会の主権を握り、少数派の見るべき理論を封殺し、自分たちの理論をさも真実であるかのように発表していくというのはいかなるが想像だけの推論ではないだろう。

しかも、これは洋の東西を問わず、どこでも見られる光景だといえる。

現代の考古学は変わったか？

森本六爾が生きた時代から八十年あまり過ぎた現代の考古学会は変化したのだろうか。

筆者にはどうしてもそう思えないのだ。

相変わらず、「古事記」や「日本書紀」をベースにした研究が横行し、その枠からはみ出さない。それらは神話であり、時

の権力者が、真実とは別に作り上げた「物語部分」がかなり多く反映されている「物語」と受け止めるべきである。

しかも、世界的にも考古学手法は大いに進歩して、日本の古代史にも応用すれば革新的な理論が誕生してもおかしくないのだが、相も変わらず、明治時代の「遺産」を引きずっているように見えてならない。

この国の歴史は二千年か？

筆者は勝手に「明治史観」と呼んでいるが、この明治時代からの「遺産」と決別することを何度も提案している。

それは、かつて、富国強兵路線で、この国を戦争へと駆り立てた皇国史観にながめるものともいえるべきもので、その亡霊とともに生きているとしたら、日本考古学会は面妖な存在である。

しかし、何度もこれが亡霊のように出現して、臆病な研究者たちを余計に怖がらせるのだ。

つい先ごろも、某政治家が、「この国の歴史が二千年」と発言して、後に訂正している。

単なる言い間違いなのだろうか。

東北の森本六爾を指して

筆者は、この素晴らしい先達である考古学者の精神を見習いたいと思う。

そしてはつきりと「東北の森本六爾」を目指そうと思う。

分野は考古学と映像分野で異なるが、そうした違いを乗り越えて、この国の歴史の革新に少しでも貢献できればいいと思う。

また、東北の埋もれた歴史の掘り起こしからそれを実現したいと思う。

その最初のチャレンジと位置付けるのが、現在制作進行中の『鬼がつくった日本刀』(仮称)である。

宮城県北部の岩出山にある中鉢美術館をじっくり取材・撮影させていたいただきつつ、古代の東北が被った「俘囚」と「移配」と「古代東北の刀鍛冶」との悲惨な関係を、埋もれた東北の歴史から掘り起こそうと企画した映像である。

今年三月に完成し、あちこちで上映して、日本刀のルーツが東北であることを訴えていきたい。

そして何よりも、日本刀という崇高な芸術を通して、東北に世界に誇れる文化があったことを示し、それで東北に誇りを取り戻して欲しいのだ。

また奈良の南部が呼んでいる

それにしても、最近奈良の南部にたびたびの縁がある。

「俘囚」と「移配」もそうだったし、今回の森本六爾も奈良県桜井市出身である。奇妙な縁続きである。

【森本六爾氏略歴】 1903年～1936年。在野の考古学者。現在の奈良県桜井市出身。幼少期には奈良県の唐古鍵遺跡を遊び場に、土器探しを趣味としていた。昭和4年(1929)、東京考古学会を組織し雑誌「考古学」を創刊。弥生時代の水田稲作農耕の存在を主張。あまり有名ではないが、考古学関係者の間では抜群の知名度を誇る。当時、明治政府の作った教科書では「古事記」や「日本書紀」の『神話』を基に日本の国の成立を教えていたため、「弥生時代」を考えることさえタブーとされていた。そのような時代背景の中で六爾はアカデミズムに対抗して、大陸からの文化の流れを、当時では珍しい言文一致の読みやすい文体の洗練された言葉で論文にまとめ、広く紹介するなど学問的情熱に溢れた人だった。彼の死の直後に弥生文化を示すたくさんの発掘物が出て理論の正しさが証明された。

【NHK 制作番組 『反骨の考古学者 森本六爾』の概要】
弥生研究に生涯をかけた伝説の考古学者の物語。アカデミズムに無視されつつもあくまで真実を追求する強烈な意思と壮絶な執念。埋もれていた六爾の野帳ノートが調査され、新事実が続々と浮かび上がる。大胆で創造的な弥生研究を成し遂げた。共に闘い、夫を支えた妻・ミツギの存在にも注目。32歳で早世した波乱の生涯にドキュメンタリードラマで迫る。